

国立大学における入試研究の動向

総

括

国立大学入学者選抜研究連絡協議会では、毎年各大学における入試に関連した研究調査結果をまとめた報告書を作成しているが、この報告書の内容を総括のあとに続く解説の表題のように11の項目に分類して、報告書編集委員が分担の上、項目毎の展望を行ったものである。

この展望は上記の「入研協研究報告書」では内容梗概としての役割を果たし、「大学入試研究の動向」では入研協の研究調査活動や大学入試の現状と各大学での入試改善への努力の一端を一般読者に紹介する目的を持っている。

異なる委員が担当しているにも拘らず、二つの項目の書き出しに“大学教育を受けるにふさわしい能力・適性を備えた者の選抜”なる文章がみられる。入学者選抜要項に定められた要件であり、これにふさわしい者を妥当な方法によって選抜するのが当然である。

しかし、大学教育を受けるにふさわしい真の能力・適性とは、何であるのか、如何にしてそれを評価するのか。現在の入試の方式・方法は、これにより能力・適性が測れるかも知れないという仮定であり、推薦入学や小論文・面接試験などによる第2次試験は真の能力・適性測定への一つの試みであるのではないだろうか。

入学者選抜要項に定められたような選抜に現状を近づけるために、各大学の入学者選抜方法研究委員会が調査研究を続け、入研協などが模

索をしている。

このため「共通第1次学力試験と第2次試験」についての基礎統計量の調査から、「実技検査・面接・小論文」など多様化した入試方法について、基礎学力の測定を目的とする共通第1次学力試験との間での相関係数調査などを行い、第2次試験の評価を試みている。相関係数が1に近いような第2次試験であれば、共通第1次学力試験の成績で合否が殆ど決定してしまい、両試験は同質のものといえよう。

「高校調査書」に関しても、学習の記録すなわち評定平均値等と合格率の関係を調査している例があるが、1次・2次両試験の特性の評価に関わる調査である。

また、これらの研究調査に関わって「選抜の諸方式」が提案される場合もあり、「受験者・合格者の属性」についての研究テーマが得られよう。

しかし、能力・適性を持った者を選抜するための方法を模索するには、上述の諸調査項目と入学後の成績等、すなわち「大学における学習及び生活」との関係を明らかにする必要がある。

大学入学後の学生の学問的伸長は、その分野への適性・能力と共に学習意欲にも強く依存する事柄である。そのためには如何なる進路指導がなされ、如何なる考えで「進路選択」をしたかが重要であろう。大学の立場からは直接この

ことに関与する性格の事柄ではないが、「進路選択」を補助する情報・助言を与える機会が多くあり、その必要性は誰もが認めるところである。キャプテン通信網を用いた〈ハート・システム〉がその一つであり、この他にもほとんどの大学では募集要項とは別に大学案内等を配布し、大学・学部・学科の特徴や内容などのPRを図っていて、さらには大学開放・高等学校側との懇談会などを開催しているのが、これにあたる。

共通第1次学力試験制度を実施してからは、事実上の2度受験制度であった2期校制度が廃止されたが、昭和62年度入試からは「受験機会の複数化」に踏み切った。これによって受験生の地理的流動性、各大学毎に受験生・合格者等についての併願大学調査などが実施されている。

これらは合格者の中から自大学への入学者数の予測などのためにも使用されている。

大学の使命の一つには、次の時代に対する学問・技術の発展に、教育面から大きく寄与することがあげられよう。目前の利害得失に拘わることの無い「入試制度」のあり方や、高校教育を乱すことのないよう配慮した入試のあり方、「大学教育・高校教育」のあり方についての議論もおざりにする訳には参らないことである。

大学教育を受けるにふさわしい能力・適性とは何か、われわれの微力では解の得られない問題であるのかも知れない。しかし入試研究調査によって一步でも着実に真理に迫る努力はゆるがせにするわけにはいかない。

共通第1次学力試験と第2次試験

共通第1次学力試験と第2次試験に関しては、ほとんどの大学において各教科、科目別点分布や平均値並びに標準偏差、各種成績間の相関等の基本的な統計的分析がなされている。また高校卒業年次、出身高校、出身地域など受験者の属性との関連に対する分析も多い。これらの調査結果は、各大学における該当年次の入試の実態の把握、次年度以降の選抜方法の改善等のための最も基本的な資料となっており、毎年同一項目について系統的調査がなされているケースが多い。本調査の中でも、昭和63年度の入学試験の結果だけを検討するのではなく、同様の

データの年次変化を明らかにし、昭和63年度の結果の特徴を抽出している例が多い。

昭和63年度の調査の特徴としては、受験機会の複数化の第2年度に当たり、受験者層の変化、すなわち全国共通1次受験者集団における自校受験者の共通1次試験得点の位置の変化、輪切り現象の有無等に関する調査、並びにいわゆる足切りラインの妥当性等に関する検討が多く見られる。また入学辞退者数を事前に適切に予測し、最終入学者が入学定員数と大きく変わらないようにすることは、各大学の入学試験実施担当者の頭を悩ませる大きな問題となっている事